

【短編・体験版】僕は目隠しをされながら美術部長さんに乳首責めされる。

「……ん？」

僕は眠りから覚めるが、何も見えない。

どうやら目隠しのようなものをされているようだ。目元に何やら布が巻きついているような感触がある。

そしてさらに、自分の口には何やら詰め物らしきものが嚴重になされているようで、全く声は出せなさそうだ。

一応、服はちゃんと着ている感触がある。しかし足元に違和感がある。

スカートを履かされているらしく、風がそのまま足元から入ってきているのだろう。

「いったい何故こんなことに…」

と思いつつその目隠しを取ろうとするも、どうも身体が動かない。

手首・足首に何かが絡みついているような感触。

どうやら手足も縄で縛られており、身動きを取れなくされているようだ。

いったい誰が、何のためにこんなことをしたのだろうか。

そう思い、僕は直近の出来事を頑張って思い出してみた。

…思い出した結果、その原因はすぐに察しが付いたのだった。

今日の放課後、僕はたまたま美術部長の山口詩織さんに呼び止められていた。

「学内展示に出ていたあなたの絵、ものすごく上手いじゃない。

どうやったらそんなに上手になれるのか教えてほしいから、もしも時間があるならこの後私の家で話を聞かせてほしいのだけど。

もちろんタダでとは言わないわよ？飲み物やお菓子くらいは奢ってあげるから。」

特にこれといった用事もなかった僕は、山口さんのこの提案にあっさり乗って家まで付いてきたのだ。

そしてそこで、最初にコーヒーを1杯貰って口を付けた数分後に...

目が覚めたら、この状態だったのだ。

そう。どうやら睡眠薬の類を盛られていたらしく、見事にはめられてしまったのである。

「おはようございます。そうやって身体をもじもじさせているところを見るに、目は覚めているよね。」

山口さんの声だ。

口の詰め物のせいで声が出せないのも、僕は「いったい何の真似ですか！？」と言いたそうに身体をバタバタさせる。

「乱暴な真似をしてしまったのは謝るわ。

...でも、少しだけ実験したいことがあるの。ちょっと付き合ってもらわね？」

そう言うと、山口さんの足音が僕の元に近づいてくる。

足音が近づいてきたかと思うと、突然僕の胸に突つかれるような感触が出てきた。

びくんっ。

目隠しのせいでこれから何をされるのかが全く分からないため、普段以上に身体が受ける感触が強くなる。

すると今度は、何やら僕が着ている服のシャツのボタンが外されていくような感覚。

シャツのボタンが全て外され、僕の身体と外の空気を隔てているのが肌着のシャツ1枚だけになったかと思うと、胸の中心部...そう、乳首をゆっくりと指でなぞってきたのである。

「んんんっ...！」

詰め物のせいで声は出せない。

だが、乳首を通して胸の中に何とも言えない刺激が伝わってくる。

もやもやとした感覚が脳内を包んだかと思うと、今度はシャツの中に着ていた肌着のシャツの中に山口さんの手が伸びる。

今度は肌着越しではなく、直接の責めが僕を襲う。

爪の部分で、僕の乳首を直にカリカリ...カリカリ...と刺激する山口さん。

「んごおっ.....んんぐうっ...！」

詰め物で声を出せなくされていなかったらどんな叫び声を出していただろうか。

爪でカリカリするだけでは飽き足らず、今度は2本の指で僕の膨らんだ乳首をつまむ。

そしてそのまま、ぐりぐりとひねったり軽く引っ張ってきた。

「んおおっ...おおっ！」

胸に流し込まれる刺激に耐えられず、縛られた手足をバタつかせて抵抗する。

当然、この状況では無駄なあがきに過ぎず、僕は目に涙を浮かべそうになってしまう。

「ふふふ...ここまではまだ準備段階よ。本番はこれからね？」

山口さんはそう言うと、僕のシャツを全てまくり上げてしまい、上半身を完全に脱がせてしまったのである。

【サンプルはここまでとなります。】